

弁護士

菊間千乃さん

「めざましテレビ」や「発掘!あるある大事典」などでの飾らない笑顔が印象的だった菊間千乃さん。35歳のときフジテレビを退職し、最難関の国家試験といわれる司法試験に挑んだ。安定した地位を捨て、自らを崖っぷちに追い込んだ理由は、何だったのか。その胸の内をうかがった。

私らしく、いつまでも輝き続けるために
長い将来を考えた末の挑戦





PROFILE

【きくま ゆきの】1972年生まれ。早稲田大学法学部を卒業後、アナウンサーとしてフジテレビに入社。「めざましテレビ」や「発掘!あるある大事典」などの番組を担当する。2005年に大宮法科大学院大学へ入学し仕事と勉強を両立。2007年にフジテレビを退社後、2010年に2度目の受験で新司法試験に合格。現在は弁護士法人松尾綜合法律事務所所属。著書に『私が弁護士になるまで』(文藝春秋)などがある。

——菊間さんは、大学卒業後、アナウンサーとしてフジテレビに入社されていますが、テレビの世界へ入られたきっかけは何だったのですか。

アナウンサーという職業には小学生の頃から憧れていたんですけど、就職活動で悩んでいるときに背中を押してくれたのが一本のテレビ番組でした。骨髄バンクをテーマにしたドキュメンタリーで、ある患者さんの姿を追っていて、結局ドナーが見つからなくてその方は亡くなってしまうんです。

骨髄バンクについては、私も新聞や雑誌で知っていましたし、友だちが活動に関わっていたりしたんですけど、どこか遠い世界の話という感覚でした。そんな私が番組に心を突き動かされて、翌日、骨髄バンクの登録に行っていました。

——翌日とはすごいですね。

自分自身でもその行動力に驚いて、テレビの影響力の大きさを改めて実感したんで

す。だから自分がお伝えした番組で、世の中の人々が何か行動を起こしたいと思ってくれたらいいな。その人の人生を変えるなんておこがましいことは言わないけれども、人生を変えるきっかけとなるような番組をつくりたいと思ったのが、テレビの世界に入った動機です。

——実際にアナウンサーになって、いかがでしたか。

憧れの職業に就くことができて嬉しかったですし、仕事も楽しかったですよ。自分が担当した番組の商品が翌日に売り切れたり、視聴率が取れたことに一喜一憂した時期もありましたし、それを仕事のやりがいに感じたこともありました。

その一方で、時間が経つにつれて自分の気持ちにも変化が出てきました。

——変化ですか。

視聴者の方が求めているものをチームでつくるという環境の中で、自分がやりたいことや追求したいこととの間にギャップが出てきたんですね。

例えば、私としては原爆投下から50年という節目に合わせて特集番組をつくりたいと思って、視聴率は取れないわけですよ。

自分がお伝えした番組で、世の中の人々が何か行動を起こしたいと思ってくれたらいいなと。

それよりは500円ランチのほうが視聴率を取れるとなると、500円ランチの特集が組まれる。そこで500円ランチを前にしたとき、本気で「うわあ、すごくおいしそう」なんて言えなくなってくるんです。そこに演技が入ってくるのは、私が信念としてきた「飾らずに、自分のありのままでお伝えをする」というところとずれてくることになります。

しかも、テレビは定期的に似たような情報を繰り返し流しているので、入社間もないアナウンサーは本気で驚くことができて、私にとっては「前にも放送したんだけど」となってしまうんです。

——確かに、テレビを見ていると、前にも見たなという情報が結構ありますね。

情報番組でも同じです。事件や事故、世の中で話題になっていることをお伝えしていると、何年かおきに同じ問題が起こってくるんです。

——具体的にどんなケースがありますか。

例えば、いじめ問題が起きたらそのときは一斉に報道されますが、毎日いろんなニュースがある中で、私たちは番組を時間内で収めるために「もっと検証が必要ですね」とか、「考えていかなければいけない問題です



「私が弁護士になるまで」(文藝春秋/2012.1)

時間と闘いながら両立させた仕事と勉強、同じ目標に向かい励まし合った仲間たちとの友情、不合格だった1回目の受験…。アナウンサーから弁護士になるまでの過程が、素直な文章でつづられている。努力の末につかんだものは、夢だけではなかった。読後、何か新しいことに挑戦したくなる1冊。

困っている人を笑顔に変えていくような仕事の仕事の仕方のほうが、自分に向いているんじゃないのかな

者に近づいて真実を知りたい」とか「影響力は小さくても確実にその人を変えていく、困っている人を笑顔に変えていくような仕事のほうが、自分に向いているんじゃないのかな」と思うようになったのです。

——それで、弁護士を目指されたと。

弁護士の資格を取れば、また違う形の番組をつくれるんじゃないかと思っていました。アナウンサー兼弁護士という形で、それまでの人生に新しい役割を付加する感じで何かできたらいいなと思ったのです。

——弁護士になるため、アナウンサーの仕事の続けながら夜間のロースクールに通われていますよね。「仕事」と「勉強」の両立は大変じゃありませんでしたか。

大変ですけど、自分でやりたいと思って始めたことなので、嫌だなど思ったことはなかったですね。

——自分がやりたいと思ったことだから、全然苦にならなかったと。

そうですね。体力的には大変でしたけれど、精神的にはすごく充実していましたね。ベッドで寝られるのは1〜2時間という生活を送っていましたので、疲れたであろうくではなくて、「はい、終わった」「はい、次」とい

う感じで毎日ずっと駆け抜けている感覚でした。冷静に「大変だな」なんて思う間もなかったです。

それに、私が通っていた夜間のロースクールは、みんな働きながら通学していましたから、大変なのは自分だけではないんです。15分遅刻すると欠席扱いだし、3回休むと試験を受けられない。

——厳しい！

仕事を調整して学校に行くだけで大変だから、みんな来ただけでたえ合うみたいな。でも、ちゃんと単位を取っていかないと卒業できないので、社会人とはにかく仕事との両立が一番難しい。

授業中もバンバン当てられるから、予習しないで行くとか、もう自殺行為です(笑)。だから、必死に勉強しましたし、負荷がかかる学校に行ったことが結果的によかったのかなと。それに、仲間がいたから頑張れたというのもあります。

——みんなで頑張るという。

そうですね。通信教育で1人で勉強していたら、いくら自分の夢とはいえ、ダラけますよね。

——モチベーションが大事なんですね。

ね」とまとめて終わりにします。

その何年後かにまた同じ問題が起きて「私、あのときも同じこと言ってたな」とか「自分があのととき言っていたことは何だったんだろう」「私の言葉は誰に向かって言っているんだろう」などと考えていると、何だか偽善者のように思えてきたんですよ、自分が。

——自分自身を偽善者とは、厳しいですね。

マスコミは客観的に事実を伝え、問題提起をすればいいのかもしれないけれど、私としては、その先を見たい、知りたいという思いが日増しに強くなっていきました。一方、仕事でお会いする弁護士さんのお話を聞いていると、事件がなぜ起こったかとか、実はどうだったのかということを知ることができるなど。

——現場で、リアルタイムで、ということですね。

そうですね。やっぱり真実への興味。それは報道記者の記者魂というか、「もつと当事

たった1度の人生、 私は後悔して生きるのが嫌だった。



大事です。あとは自分を厳しい環境に追い込むということ。仕事をしながらのロースクールは、誘惑を断たざるを得ない環境なわけです。授業は毎晩7時半からだから、会社の飲み会にも行けなくなるし、唯一授業がない日も予習・復習をしておかないと授業についていけないから、飲み会の参加とか無理ですね。ロースクールの友だちと、授業の後にちよつと話をするくらいで、終電に乗り遅れないように皆で駅に走るような生活でしたので。

——そんな生活の中で、アナウンサーを辞

めようと思われたのは、どうしてですか。

辞めなかったら司法試験に合格できないと思ったからです。

ロースクール3年生のとき、ストレスで声が出なくなることが何度かあって、番組の直前に声が出なくなったりすると、喉に注射を打つんですね。

——うわっ、痛そう。

そうすると声が出るんですよ。4年生になれば勉強ももつと忙しくなるし、両立は無理じゃないかなと思っていたところに、その年の司法試験の合格発表があって、私が通っていたロースクールからは約50人中6人しか受からなかったんです。7〜8割は受かると言われていたのに、現実はこのように厳しいんだと思って。しかも、働きながら受かった人は1人だけ。

新司法試験制度では、ロースクールを卒業後5年間のうちに3回までしか受験できないから、1回目で受かるくらいの強い気持ちで勉強しなければ、アツという間に3回受験して不合格のまま終わるだろうなと思ったんですね。かと言って、勉強のために仕事を途中で抜けたりすると、周りに迷惑をかけます。仕事をしていても勉強が気になるし、勉強していても仕事が気になって、どっ

ちつかずになつていくんですよ。

——だったら、「休職」という方法もあったんじゃないですか。

そうですね。だから、休職して合格された方に相談した上で、私も会社に休職したいと申し出たら認めてくれたんです。ただし、休職するにあたっては、アナウンサーだから対外的に発表しないといけないと言われました。「菊間は司法試験の勉強のために1年間休みます」と。

それは個人的な話だから嫌ですと断ったのですが、アナウンサーは公人だから発表は避けられないと言われて、私の中では「休職」という選択肢がなくなりました。「退職して勉強に専念する」か「働きながら勉強する」かどっちかしかなくて、働きながら受験したら9割受からないというのが自分でわかっていましたよ。やっぱり仕事が忙しいから、勉強時間が取れませんので。

——それは難しい選択ですね。

最大5年間のチャンスはあるから、とりあえずロースクールを卒業してから一生懸命勉強して、ゆつくり受験するという方法もあると思ったんですけど、考えてみたら、私はロースクールという枠があったから勉強も頑張れたし、その枠がなくなったら仕事のほうにシフトして勉強しなくなっていくだろうなと思いました。

それに、45歳の自分の姿を想像して、会社に残っていたとき私はどう思うだろうかと。たぶん仕事も安定していて、お給料も

よくて、アナウンサーという肩書もあるだろうな。でも、自分の性格上、30代で挑戦しなかったことを後悔するだろうなと思ったんです。たった1度の人生、後悔をして、その後の人生を過ごすのは嫌だと思いました。片や仕事を辞めたときのことを考えて、司法試験に落ちるかという、絶対に落ちるわけではない。でも、合格も絶対ではない。それは仕事を辞めてから司法試験を受けるまでの自分の努力次第だと思っただけで、自分で自分を信じて、自分の可能性に賭けて頑張ればいいだけの話だっと思ってたんです。

——ご自身の年齢のことは考えられなかったのですか。

順当に言えば40歳で結論が出ると思いました。40歳のときに、無職になっているか、弁護士になっているか、イチかバチかの人生の賭けです。

45歳で夢をあきらめて安定を取っている自分と、夢にチャレンジした結果40歳で何もなくなった自分とを想像して、私はきつと後者の生き方のほうが自分に納得がいくと思いました。

司法試験に3回とも不合格となるリスクは自分のこれからの努力次第で減らすことができる。現時点でのリスクの大きさは、勉強することによってどんどん減らせるんだから、それはもう自分次第だと思ったので、仕事を辞める決心をしました。

——辞めることに対して、ご家族や職場の



40歳のときに、無職になっているか、
弁護士になっているか、
イチかバチかの人生の賭けです。

仲間など周囲の方の反応はいかがでしたか。

両親は何も言わなかったですね。私の性格を知っていますから、やりたいようにやりなさいと。ロースクールの友だちは試験に備えてみんな会社を辞めていたので、「ようやく菊間も受験態勢に入ってきたか」って感じでした。ただ、会社の人たちには、試験

に受かってから辞めればいいんじゃないのって随分言われました。辞めるときは、温かく送り出してくれましたけどね。

——その大きな決断の後、1回目の司法試験で「不合格」という厳しい現実に向面されたときは、どのようなお気持ちでしたか。

退職前は、チャレンジするための退職な

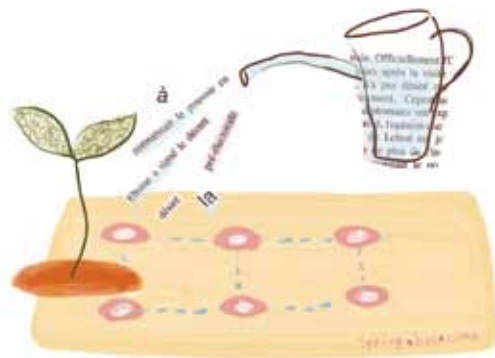
ら後悔しないと思っていましたが、いざ「不合格」を突きつけられると「何で仕事辞めたんだろう」って、ずっと思っていましたね。辞めなきゃよかったって。

——やはりそう思いますよね。

思います、思います。

——精神的につらかったでしょう。

私にとつては「レインボーブリッジ」フジテレビ」なので、レインボーブリッジが目に入っただけで「ああ、本当に辞めなきゃよかった」と。「思えば、私はそんなに頭良くなかつ



た」とか「私は努力して何とかここまでやってきた人間で、司法試験って本当に頭の良いい人たちが受ける試験なのに、何を過信してしまったんだろう」とか「やっぱり無茶しないで安定を取っておけばよかったな」とか。辞めてから、1回目の試験を受けるまでは、本当に楽しかったんですよ。辞めてよかったな。24時間、勉強のことだけを考えていればいいって、なんて幸せなんだろう」と思っていました。

働きながら勉強している方は皆さんそうだと思いますが、勉強したくても時間がなくてできない。アナウンサーだと、テレビに出る以上、目にクマをつくれなから睡眠を取らなきゃとか、美容室も定期的に行つて、ネイルもしなきゃとなるんですけど、気持ちとしてはメイクをする時間すら惜しいくらい。ロースクールに入ってからというもの、ひとときも法律のことを考えない瞬間はないですから、勉強に没頭できるのは嬉しくてしょうがなかったんです。

ところが、試験に落ちた後は、36〜37歳にもなつて働きもせず、合格するかもしれない

勉強だけをしてお金を使っていく自分という存在に疑問を持ちたり、何だか生きていく意味がないんじゃないかと思ったりして。誰にも必要とされない自分がすごくつらかったです、このままどうなるんだろうという不安は絶えずありましたね。

——気持ちが追いつめられたんですね。

ですから、私は安易に人に会社辞めたほうがいいのかって勧めません。今いる場所で頑張ったほうがいいって言いますね。本当に大変だから。

——そんなつらい思いをされた後、何とか気持ちを立て直して、2回目の司法試験で見事合格されたとは、すごい精神力ですね。その後、司法修習を受け、晴れて弁護士とされたわけですが、現在はどういうような日々をお過ごしですか。

私が所属する弁護士事務所は訴訟を多く扱っているんで、週に2〜3回は法廷通いです。事務所においても、依頼者の方と打ち合わせをしたり、電話会議をしたりしています。夜19時くらいになつてようやく落ち着いて、書面を書くことができる。調べ物をしたり、日中の打ち合わせを反映して書面を作成しますから、時間がかかりますね。毎日24時過ぎまで働く日々です。

——これから、弁護士としてやっていくたことは何ですか。

いろんな方に聞かれるんですけど、正直、わからないんです。まだ弁護士になって間も

誰にも必要とされない自分が
すごくつらかったですし、
このままどうなるんだろうという不安は
絶えずありましたね。



私にとっては、
明日何が起こるか
わからないところが
生きていることの
面白さです。

ないですし。

仕事をしているうちに好きな分野や自分に合う分野がわかってくるんじゃないかと思っています。毎日一生懸命仕事をしていれば、自然と専門分野も決まってくるんじゃないかと、そこは現状はあまり突き詰めて考えていません。

—— 司法試験に挑むにあたり、プライベートでは結婚や出産をあきらめなければならぬという考えが頭をよぎりませんでしたか。

一切よぎらなかつたですね。司法試験に受かった後でも結婚や出産はできると思っていましたから（笑）。恋愛や結婚のために夢をあきらめるという発想はないです。

恋愛や結婚は誰かと協力しながらつくっていくものですが、相手が自分の夢をかなえてくれるわけじゃありませんから。自分の

夢は自分でつかみ取るしかないと思います。

あと、あまり年齢で物事を考えないですね。30歳を過ぎたからそろそろとか、35歳だからどうかということも考えなかつた。ただ、出産はタイムリミットがありますね。

—— なるほど。年齢で物事を考えないんですね。そんな菊間さんは「ライフプラン」と聞いてどのようなイメージを持たれますか。

ライフプランという将来に向けての安定を求めているというイメージがあります。私自身はあまり安定を求めないタイプです。そうじゃなきゃ、35歳で退職して司法試験なんて目指さないですよ（笑）。私にとっては、明日何が起こるかかわからないところが生きていることの面白さです。

ただし、自分の夢やなりたいたい自分があつて、そこに向かってどうするかということは常に

考えています。

—— 「座右の銘」があれば教えてください。
座右の銘は「為せば成る」です。「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」は、父が好きな言葉で、私も座右の銘にしています。

世間では、親がお金持ちだとか、お金持ちと結婚したとか、本人の努力以外のところで周囲の目が変わることがありますよね。でも、私は自分がこの世に生を受けて、そこから努力すればそれだけのものが得られると思いたいです。「為せば成る」ことを自分自身で感じたいし、自分より年下の人たちにも「世の中なんて所詮こんなものですよ」とあきらめるような人生は送ってほしくないと思っています。

他人をうらやましがったり、自分はチャンスに恵まれないと考えるんじゃないで、自分の力でつかみ取る。夢を実現するために今、何をしたらいいかということを考えて、ひたすら努力する。それで1つずつかんでいけばいいんだと思います。

私は、夢をつかもうとするその過程がすごく楽しいんですよ。ロースクールで頑張っていたときの自分が一番輝いていたし、カッコ良かったなつて思えるんです。そういう成功体験が、次につながっていくんだと思います。夢は誰かに与えてもらうものじゃなく、自分でつかむものですから。

—— ありがとうございます。

（インタビュー／協会職員 落合泰雄）